



| | |
|--------------|---|
| Title | 宮沢賢治「貝の火」論：父と子の欲をめぐって |
| Author(s) | 西村, 真由美 |
| Citation | 待兼山論叢. 文学篇. 2005, 39, p. 19-35 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/9377 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宮沢賢治『貝の火』論

—父と子の欲をめぐって—

西村 真由美

はじめに

『貝の火』は、子兎のホモイが川で溺れていたひばりの子供を助けたお礼に与えられた、貝の火という不思議な宝珠をめぐる物語である。貝の火を手にしたホモイは周囲の動物たちから敬われ権力を手にするが、慢心を募らせ狐とともに悪事を重ねた結果、玉は砕け、その粉が目に入りホモイは失明してしまう。貝の火の炎が、なぜホモイの度重なる悪行にもかかわらずさらに美しく燃え盛るのか、という点をはじめ、『貝の火』は読者に多くの謎を残す物語であるといえよう。

先行研究ではこの作品に関して、法華経や作家論的な観点からの考察が為されることも多く、そのような観点も重要なことは確かだ。が、このような作品の外からのアプローチばかりではなく、作品に記された一つ一つのへこ（とば）に着目しながら分析するという作品の内側からの考察によって、見えてくるものもあるのではないか。本論

は、従来見逃されがちであった本文中の細かなへことばや、賢治の他の作品との関係に着目しながら、主にホモイとホモイの父との関係を改めて捉えなおすことよつて、この作品に新たな側面を見出そうとするものである。

一、宝珠「貝の火」——へすきとおるへ燃えるへ玉——

まず、タイトルにもなつてゐるこの「貝の火」という宝珠について考察してみよう。紀野一義氏は「この貝の火の宝珠は、あきらかに「マニ宝珠」からの直接の着想」として貝の火と法華経の関係に言及した。また、秋枝美保氏はこの玉が「鳥の王からの贈物」であるという点から、「王」なる絶対者の権威の象徴」と捉えている。他にも諸家様々に論じられてゐるが、本論では、この玉の次のような特徴に着目することからはじめたい。

玉は赤や黄の焰をあげてせわしくせわしく燃えてゐるやうに見えますが、実はやはり冷たく美しく澄んでゐるのです。目にあて、空にすかして見ると、もう焰は無く、天の川が奇麗にすきとほつてゐます。

まず、着目したいのはこの玉が「美しく澄んだ」、へすきとおるへ玉なことである。賢治の作品の中ではへすきとおるへというところが非常に重要な意味を担つてゐることに注意したい。『よく利く薬とえらい薬』では「雨の雫のやうにきれいに光つてすきとほつてゐる」ばらの実が奇蹟を起こし、主人公の母の病気が治る。また、童話集「注文の多い料理店」序で、この物語が「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」を願う、と記されていることはあまりに有名であらう。「すきとほつた風」という表記は『どんぐりと山猫』『ポラーノの広場』をはじめとして数多くの例がみられる、賢治の描く理想郷、イーハトウの清浄さを示す言葉であるし、また、『風の又三郎』の

高井三郎という少年が「赤い革の半靴」であるのに対し、『風野又三郎』の中の幻想的な風の精である又三郎は「すきとほった靴」であることも興味深い。大塚常樹氏³⁾は「透明」や「無色」は賢治テクストでは天上世界の属性」と指摘しており首肯されるが、この貝の火もまた「へすきとおる」という「へ聖」なる特徴を持つ玉であることを忘れてはならない。

この玉のもう一つの特徴は、玉の中に「焰」、「火」が燃えるように見えるということである。中でも、この玉が「円い赤い光るもの」と表現され、「もつともつと赤く」燃えている、とも描かれるように、とりわけ「へ赤い焰」が強調されていることが注目される。ホモイ親子はこの火を燃やし続けようと必死になり、玉の中に燃える火の激しさに美しさを見ている。しかし、ひばりの親子は貝の火を手渡すとき「王さまのお言伝ではあなた様のお手入れ次第で、この珠はどんなにでも立派になると申します。」と伝えたが、このひばりの言葉には玉のどのような状態が「立派」なのかは一切示されていない。また、大噴火の溶岩に流されても玉は「却って前より美しく」なったという、驚の大臣のエピソードの中でも、「きづも曇りもつかないで」とは記されているが、火が燃えるとは一切書かれていない。それにもかかわらず、ホモイ親子は、宝珠が「立派」になるという意味を火が激しく燃えることだと勝手に解釈しているのである。ところが、ホモイ親子の解釈とは裏腹に、火の激しが増すことは宝珠が曇る前兆だったのではないか。『まなづるとグアaryana』では「あたしの光でそこらが赤く燃えるやうにならないくらゐなら、まるでつまらないのよ」といって花の女王になりたい「赤いグアaryana」とつつましやかな「白いグアaryana」が対比的に描かれる。また、『双子の星』では海の底におとされた童子たちが「青いひとでのしるし」をつけているのに対して、童子たちに「こら着物をよこせ。」「俺の靴をふけ。」と荒々しく接する周りのひとでたちは「赤いひとで」として描

きわけられている。大塚氏は「赤眼」⁽³⁾は、その生物が修羅意識に捕われていることを示す指標」とし、「仏教では赤は「ラーガ」といい、愛欲や貪（執着）の意味をもつ。」と述べるが、この玉の火の中でも特に「赤」が強調されていることには注意すべきである。また、赤色に限らず、激しく燃える火は、賢治作品の中で修羅の表象としてしばしば用いられている。「土神ときつね」で、逆上した土神が狐を殺してしまふ場面の直前に、「青く光つてゐたそらさへ俄かにガランとまっ暗な穴になつてその底では赤い焰がどうどう音を立て、燃えると思つた」という表現が見られるが、これと極めて似た記述として、「サガレンと八月」では、「いままでの明るい青いそらががらんとしたまつくらな穴のやうなものに変わつてしまつてその底で黄いろな火がどどん燃えてゐるやう」という表現になっている。貝の火の赤い焰だけでなく、「まるで赤や緑や青や様々な火が烈しく戦争をして、地雷火をかけたか、のろしを上げたり」という激しく燃える火もまた、煩悶や欲といった悪心の象徴と考えられる。貝の火のもつ「赤い焰」へは「美しい焰」は、「へすきとおる」ことが「へ聖」なる特徴であつたのとは対照的な、「へ魔」の表象であることが伺える。

作品中では、ホモイが狐とともに悪事を犯すことに貝の火はさらに美しく燃え盛つていく、ということが繰り返される。渡部芳紀氏は「犯した罪の結果が直ぐに罰として反応してこない」ためだとの焰の意味を解釈した。一方、伊藤真一郎氏は、⁽⁵⁾貝の火の本当の美しさとは「美はやはり冷たく美しく澄んでゐる」点にこそあつたのに、「それを、もつぱら、へ目からはなすと又ちらりちらりと美しい火が燃え出」すという点に、見ていったところにホモイ親子の大きな錯誤があつた」と述べており、本論もこれに概ね同意するが、伊藤氏の言及はここでとどまつており、その裏づけは提示されていない。しかし、以上に見てきたようなこの玉の特徴と、その表現の賢治作品での用いら

れ方を見れば、ホモイが狐とともに悪い事をする度に、〈魔〉の焰が燃えるのは至極当然のことだと理解される。ところが、こう考えていくと、一つの疑問にぶつかる。それはホモイが貝の火を得た次の日の朝の記述である。

玉の美しいことは、昨夜よりもつとです。ホモイは玉をのぞいて、ひとりごとを云ひました。

ホモイが初めて貝の火を手にしたときには、その火は「ちらりちらりと美しい火が燃え」という状態だった。ところがここでは「昨夜よりもつと」「美しく」「火花だ。火花だ。まるでいなづまだ。」というように、前日よりその焰は激しくなっている。貝の火の焰が〈魔〉の表象であるならば、狐と共に悪事をおかすと焰が激しくなることは容易に理解されるが、このことのみが焰を燃やす理由であったと考えると、ただ寝て起きただけの二日目の朝なぜこの火が激しくなったのかが説明できないことになる。この疑問を考える上で着目したいのは、ホモイの父母という存在である。特に、ホモイの父とホモイとの関係を分析することによってこの物語に新たな側面を見出すことが可能となると考える。

二、ホモイの無欲・父の欲

ホモイの父母については既に多くの先行研究で言及がなされてきている。ホモイの父については平尾隆弘氏が考察しているような、賢治の父と重ねる作家論的な視点において早くから着目がなされてきた。また、渡部氏は、「結局本人は父などの警告にも気づかず罪を重ねてしまう。」と述べ、子に警告を与える存在としての親の姿を読み取り、それにもかかわらずホモイが失敗をおかすと捉えている。一方、青木美保氏は「お前はもう立派な人になつ

「たんだから、りすなんか恥しいのです。」と息子に語りかける母親について、「この宝珠を手にした息子を心から誇りに思い、却って息子の自惚れを増長させる結果を招く。」と指摘している。また、佐藤勝治氏も、角パンを家族で食べてしまうことについて、「どこの主婦でも強烈な家族利己主義者」とし、「貝の火をくもらせたのはホモイひとりではなかった」と述べ、玉を衰退させた一因が母にもあったことを指摘している。では、父親はどうだろうか。青木氏は、父が最終的に角パンを食べてしまったという「致命的な」一件をあげ「父も母も、間接的に狐の悪行に加担してしまふ」としながらも、「ホモイが失明するくらいで済んだのは、この父親の働きがあったからだと言ってもいいぐらい」として、母親とは対照的なホモイの父の像を指摘している。しかし、この父にもやはり玉の「魔」の焰を強まらせた一因があるのではないか。そして、それは従来よく指摘されてきた、角パンを食べてしまふという「致命的」な一件に留まるものではない。

「ひばりさん。僕はこんなものいりませんよ。持って行って下さい。大変きれいなもんですから、見る丈で沢山です。見たくなったら又あなたの所へ行きませう。」

まず、この一文に着目しよう。ホモイが初めて玉を見た時、「大変きれいなもん」と思いながらも自分のものにしたとは思わず、貝の火を断つていふことを重視したい。この時点で、ホモイは無欲であつて、宝珠への執着心をもつていなかったと解釈できる。ホモイは作品冒頭場面で、我が身の危なさを顧みずひばりの子を献身的に救助した結果、貝の火を手にしたが、この彼の「献身」は、自分という一個の存在のみに執着しないという「無欲さ」に由来する善行だったといえる。このホモイの「無欲さ」こそが、彼の「献身」の根源となっていたのだ。しかし彼の

無欲の心は次第に変化していくことになる。そこに大きく関係してくるのは、ホモイの父の存在である。家に帰ったホモイはすぐこの玉を父に見せるが、そこで父は「これは有名な貝の火という宝物だ。これは大変な玉だぞ。」といい、「鳥に二人魚に一人」しか持ち続けられなかったという秘宝を、「よく気を付けて光をなくさないやうに」とわが子を諭す。ここからは息子を数少ない偉人たちにならせたい父の欲望を見出せるが、まず、この玉に飛びつき欲をだすのは従来論で正義の味方のようにホモイを導くと捉えられてきた、父親なのである。確かに、父はホモイの悪事を幾度も見抜き、矯正せんとする役割を果しているのだが、それが本当に正義のためだけであったのかは、作品中繰り返される、玉が燃えているのを確認したとたん黙ってしまふ父の姿に着目すると極めて曖昧であり、その姿からは、貝の火に全ての判断をゆだね、玉さえ維持できていればそれでよいというかのような、この宝珠への父の執着心を見ることが可能なのではないか。玉の受け取りを断りまでしたホモイの無欲な心は、このような父の反応に促され、次第に変化していく。父の言葉を聞いたホモイは、「それは大丈夫ですよ。僕は決してなくしませんよ。」「僕は毎日百遍づつ息をふきかけて百篇づつ紅雀の毛でみがいてやりますよ。」と答えその玉への執着心を見せ始める。そして「僕はこんなものいりませんよ」といつていたホモイが、「玉は僕持つて寝るんだから下さい。」というまでに変わってしまい、次の朝には「まづ第一に玉を見て、玉をのぞいて、ひとりごと」をいい、その執着心を増していく。ホモイの〈猷身〉の源であった〈無欲さ〉は父との会話以降急激に崩れていくのだ。

ここで先ほど提起した問題にかえりたい。玉を得て抱いて寝た次の朝、なぜ貝の火の焰が激しくなったのかという問題である。ホモイが初めて貝の火を手にしたとき「ちらりちらりと美しい火が燃え」という状態だったこの宝珠の炎をさらに激しくさせたものは、父親がホモイの中に芽生えさせた、この玉への〈欲〉だったのではないか。

この玉を大事に持ちつづけようという〈欲〉を抱いたときから、もうすでにこの宝を失う方向へと向かっていたのだ。

もともと玉への執着を持たなかったホモイの〈無欲〉な心は、欲を持つ父の影響によって変化していた。そしてそれは玉の〈魔〉の火をさらにもやす糧となっていた。母がホモイの驕りを助長する働きをしていたのと同様、父もが失敗の要因となるような影響をホモイに与えていたのである。愚かな子供が、親の警告にもかかわらず破滅する話としてとらえるのはこの作品の表面のみを読んでいるに過ぎず、「僕はこんなものいりませんよ」といついた無欲の子供が、親という大人の欲によって心を変えていく物語と読むことができるのではないか。

三、親子関係における父と子の〈欲〉

「お前はよく気を付けて光をなくさないやうに」という父の言葉は、当然といえば当然の父の子に対する注意かもしれない。しかし、その一言を境にホモイの心が大きく変わり出したことは明確である。さらに注目したいのは、「僕なんかきつと立派にやるよ」といつてこの玉を大事にしようとするホモイの中に、自分こそ貝の火を持ち続けてやろうとする、父に対して自己の力を誇示したい欲望が潜んでいるのではないかと考えられることである。後にホモイが様々な悪いことをしていくのにも、父母を超えたいという気持ちが大きく関係している。母親に言いつけられて、野原で鈴蘭の実を集めながら「ふん、大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや。」と言うホモイの姿には、そんな彼の気持ちたちが垣間見える。また、「おっかさん。僕の腕前をごらん。まだまだ僕はどんな事でもできるんですよ。」と言い、角パンを出しながら「お父さん。い、ものを持って来ましたよ。あげませうか。まあ一寸たべてごら

んなさい。」と話しかけるホモイの中にも親を超えたい欲望が色濃く見出せよう。当の本人は「お父さんだつて、こんな美味いものは知らないだらう。僕はほんたうに孝行だなあ。」と、それを「孝行」だと理解しているが、その裏に父への対抗心があることは明らかである。それは、語り手が次のように語るほど、家庭の中で絶対的な強さをもつ偉大すぎる父への息子の抵抗である。

ホモイはもう大丈夫と思つたので、一目散におとうさんのお家へ走つて帰りました。

ここで、ホモイの帰る「お家」が、わざわざ「おとうさんのお家」と書かれていることは非常に特徴的である。『銀河鉄道の夜』でも、ジョバンニの家が描かれるが、それは「裏町の小さな家」と表現されており、決して「お父さんの家」や「お母さんの家」とは表現されていない。この一語には、この家庭の中の父と息子との関係が非常に効果的に示されているといえよう。ホモイの中には親への「孝行」と、親への「抵抗」という相反する二面が渦巻いているのである。

平尾氏⁽⁶⁾は貝の火を「ホモイが、すなわち賢治が切望した、父を超えうるひとつの絶対的な倫理の基軸」だと述べ、子の父を超えたい気持ちに言及しているが、ここで見逃してはならないのが、ホモイの中だけではなく父の中にも相反する二面が存在することである。ホモイが何か悪いことをするたびに、父は「お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きつと曇つてしまつてゐるから。」と繰り返す。しかし、父の予想に反してこの玉はさらに炎を上げて美しく燃え盛るばかりである。既に述べたようにこの「魔の火」が燃え盛るのは当然の結果だったので、火の華やかさばかりに目を向ける父はそのことを見抜けない。「ホモイ。お前はもう駄目だぞ。今日こそ貝の火は砕けたぞ。

出して見ろ。」という父は確かに子を諫め導こうとしている。しかし、その裏には父として子よりも強い存在であろうとする欲をも見出すことができる。「今日こそ」というこの言葉には、出来れば貝の火が砕けていてほしいと願うような父の気持ちが見出さずにはいられない。しかし、息子以上にこの貝の火を保持したいと思っている父には、この玉をなんとしても失いたくない欲もある。父の中では様々な「欲」が矛盾しながら渦巻いている。息子より強い自分でいたい父は、息子の目の前で貝の火に関する予想を外すという失態を何度も見せてしまいが、一方でこの父は日をおうごとに、より強い態度で子に臨むようになる。はじめは「ホモイ、お前は少し熱がありはしないか。」と静かに諭していたのに、次の日には「こんなものをおれは食べない。」と云いながら、角パンを「土に投げつけてむちゃくちゃにふみにじり、さらに次の日には「こらっ何をやる。」と云ふ大きな声」で登場し、「ホモイの首すぢをつかんで、ぐんぐんおうちへ引いて行」くという圧倒的な強さを示し、父としての「権威」をかざしていく。それに従って、はじめは父の注意を聞き入れ、改心してむぐらに謝っていたホモイは、次の日には注意されたにもかかわらず角パンをもらい続け、さらには「あの玉が砕けたり曇ったりするもんですか。」と父を否定するというように、抵抗を強めていく。貝の火という宝珠を囲みながら、ホモイと父との親子関係の中にも、親を抜こう、子に抜かれまいとする「欲」がどんどん強まり、玉の「魔」の火はさらに燃え上がるのである。

四、子供だけの世界・大人との世界

貝の火を得たことよって、ホモイは世間から丁重に扱われるようになった。世間はホモイが玉を得たとたんだ態度を変え、この宝をもつホモイを絶対的な力を有する救世主として崇めているようである。しかし、そもそも貝の

火を持つているということ自体が本当に価値のあることだったのだろうか。ホモイが玉の受け取りを拒否した時、ひばりの親子は「私共の王からの贈物でございませうから。お納め下さらないと、又私はせがれと二人で切腹をしないとなりません。」と云って、半ば押し付けるようにして「あわて、」立ち去っている。貝の火はホモイの善行のお礼として与えられているため、この宝珠は一見、「鷲の大匠」に代表されるような、偉大な救世主だけに与えられる玉であるかのように見える。しかし、ホモイの前にこの玉をもっていたというこの「ひばりの王」はホモイが受け取らねばひばりの親子に切腹を申し付けるといふ暴君である。また、「これをこのまゝ、一生満足に持つてゐる事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけ」といふように、この玉を持ち続けられなかつた沢山の失敗者たちにも一度はこの玉が与えられていたらしい。これらのことを考えると、この玉は必ずしも完全なる聖人だけにやってくるものではないようである。この玉を得た、と云ふことには実はたいした価値はなく、これをへ持ち続けられると云ふことが本当の聖人にしかできない、という宝珠だったのだ。しかし、「年を老つた野馬」がホモイに「あなた様は私共の恩人」と涙するように、周囲の動物たちはこの玉を得たということそれ自身が救世主を意味すると信じて疑わない。ホモイの父母も含み、世間は貝の火という玉に「権威」を見出して、それを盲目的に信じ込んでいる。「僕はこんなものいりませんよ」と云えたホモイはこの幻の「権威」から外れたところにいたのだが、周囲の影響によってホモイもその「権威」を信じてしまつたのである。

しかし、実際ホモイはこの貝の火から何の力も得ていなかった。そもそもホモイは自分の判断と力でひばりの子の命を救えた「行動できる子供」だったが、貝の火を得たときから、ホモイはどんどん「自分で行動できない子供」になつていく。角パンを毎日もらうという契約によつて、ホモイは毎日狐と接することになるが、その日のするこ

とは、「何か面白いことをしやうちゃありませんか。」「動物園をあなたは嫌ひですか。」と、常に狐が提案し決めホモイは狐の言うがままに動き、自らの行動する力を失ってしまう。さらに、狐以外にもホモイの行動する力を失わせていく存在がいる。それはホモイの父母である。作品中繰り返される、貝の火を箱から取り出して見る場面に着目すると、「お母さんが泣きながら函を出」すというように、貝の火の入った函は常に母により管理されており、「お父さんは函の蓋を開いて見ました。」と、それを取りだして見るのは常に父であることが伺える。ホモイのもらった玉ははずが、玉をめぐる行動は全て両親によって行われているのである。「おっかさんが出て来て泣いておとうさんにすぎりました。」というように、叱る父にないですがることさえホモイ本人はせず、母が代行してしまう。作品の最後に、貝の火を曇らせてしまった親子は狐と戦うために野原へと出て行く。「お前はいのちがけで狐とた、かふんだぞ。勿論おれも手伝ふ。」と父は言うが、「お前」がたたかい、「おれ」は「手伝ふ」はずが、その後の言動は全て父によって為されていることは注意すべきである。狐をやつつけるのも、鳥たちを助けるのも、その後には鳥たちと言葉を交わすのもホモイの父だけで、当のホモイは何も言えず、何も出来ず、ただ「みんなのあとを泣きながらしょんぼりついで行」くばかりである。そして、ここまで全て自分がやってしまう父の姿に、父としての「権威」を保とうとする欲、貝の火という「権威」ある玉をなんとか保持したいという欲があることを見逃してはならない。ひばりの子を自分一人の判断と力で救うことのできたホモイは、貝の火という「権威」に盲目的な大人によって自ら行動する力を奪われた結果、ついには「魔」の猛火から連想される「煙」が目に入ったことによって、自分で見ることすらできなくなってしまうのである。

作品の冒頭部分は、「子兔」のホモイと、「ひばりの子供」のみが登場するように設定されているが、冒頭の川原

が「子供だけの世界」として設定されたことに注意を払いたい。賢治作品の中ではしばしば「子供だけの愉快」が描かれている。『黄いろのトマト』では、「おとなはすこしもそこらあたりになかった。なぜならペムベルとネリの兄〔妹〕の二人はたった二人だけずるぶん愉快にくらしてたから。」と、子供だけで「ずるぶん愉快に」くらしていた兄妹が描かれている。また、『雪渡り』での「狐の幻燈会」は、十一歳までしか入れず、そこで人間の子供たちが共に楽しい時間を持てるのも子供の狐だけで、「大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。」と書かれている。大塚氏は賢治作品の狐について「特に『黒ぶどう』や『貝の火』においては、欲がない、あるいは本能的に利他行を行う子供のもつ好ましい性質に対し、巧みにつけいって悪に染めさせるといふ、大人の世界の論理を代弁する重要な役割を担わされており、大人と子供のあり方をめぐる重要なイデオロギーの一端を担っている。」と述べている。しかし、『貝の火』において、ホモイを悪に染めていくのは、狐だけではない。息子のために良かれと思い行動する父母の中にも、子供を失墜へと導く要素を見出すことができる。子供だけの空間だった作品冒頭の川岸で、怖しさを感じながらもひばりの子を救えたホモイの美德は、父母という大人や、狐という他者が介入してくることによって失われてしまったのである。

おわりに

作品冒頭場面、ホモイはひばりの子を助けるといふ「良い心」をもっていた。が、その一方で、ひばりの子の醜さに「ぎよつとして危なく手をはなしそうにな」といふ一面をも持っていた。この彼の側面は、その醜さゆえによだかを忌み嫌った『よだかの星』の周囲の鳥たちにも通じるが、「良い心」の裏に、ホモイはよだかをいじめる

鳥たちにも通じるような「悪い心」の種をも心に持っていたといえる。ホモイの「良い心」が十分に引き出されていたならば、もしかしたらホモイは驚の大臣たちのように貝の火を保持しつづけられたかもしれない。しかし、父母をはじめとする周囲との関係の中で、芽をだしてしまつたのはホモイの「悪い心」の種の方であつた。

「貝の火」というこの宝珠の名前は「貝」と「火」とが合わさっている。「貝」は「水」に属するもので、「水」は「へすきとおる」へ「聖」なる性質に繋がり、「火」は貝の火の中に燃える「魔」の火である。「水」と「火」、「聖」と「魔」という相反するものが一つになつたのが、この宝珠だつた。村瀬⁽⁹⁾字氏は作品冒頭場面⁽⁹⁾で、ホモイがひばりの子を救いながらも、その醜さにぎよつとして着目し、「へ善いこと」をやりながら、まさにその最中に「善いことに反すること」をもやっていたと述べ、「へ貝の火」とは人間のもつ「へ対感情」そのものの象徴」と述べたが、村瀬氏の言うとおり、この玉は「へ相反性」の象徴であろう。しかし、その「へ相反性」とは氏が指摘した冒頭場面のホモイの持つ二面にはとどまらない。親子関係をめぐるホモイと父それぞれの中にも、父母への「へ孝行」と「へ抵抗」、子供への愛と父として子に勝りたい欲と言う、相反する二面が存在しており、この物語のもつ様々な「へ相反性」をこの玉は象徴しているのである。

「泣くな。こんなことはどこにでもあるのだ。それをよくわかつたお前は、一番のさいはひなのだ。目はきつと又よくなる。お父さんがよくしてやるから。な。泣くな。」

窓の外では霧が晴れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねさうは「カン、カン、カンカエゴカンココカン。」と朝の鐘を高く鳴らしました。

狐と「動物園」をすることになる日の朝に「陰気な霧」が出現していたが、最後の場面では晴れていく。夜があけて霧が晴れるこの展開は一見、ホモイたちの行く末の「すきとおる」ような明るい展望を予感させるものに見える。しかし、それがあくまでも「窓の外」の話とされていることは興味深い。「お父さんがよくしてやる」という発言には依然として自分が行動してしまふ父親の姿を見て取ることが出来、「窓の内」の親子の中にまだ「火」は燃えていることになる。この物語の結末にもまた、「水」と「火」のような二面性が付されているのではないだろうか。

〈子供〉であるホモイが父母や狐を筆頭とする周囲のものたちによって影響をうけながら、自らの「良い心」を失っていくことに、この物語のもつ重要な要素が秘められているように思える。父も母もホモイも、決して悪人ではなかった。それゆえに一層、この物語の訴えるものは深いのではないだろうか。

註

- (1) 紀野一義「賢治文学と法華経」「宮沢賢治と法華経」(普通社)一九六〇
- (2) 秋枝美保「宮沢賢治「貝の火」における父子の葛藤——歪んだ報恩譚の意味——」「近代文学試論」一九九二・一
- (3) 大塚常樹「宮沢賢治 心象の記号論」(朝文社)一九九九
- (4) 渡部芳紀「宮沢賢治——童話の世界II——」「解釈と鑑賞」一九九六・四
- (5) 伊藤真一郎「貝の火 賢治童話の〈解析〉作品の外と内の、二つの発見」『国文学』一九八二・二
- (6) 平尾隆弘「宮沢賢治」(国文社)一九七八
- (7) 青木美保「貝の火」論『比治山女子短期大学紀要』一九九〇・三
- (8) 佐藤勝治「貝の火」——ある親子の会話——『解釈と鑑賞』一九八四・一一
- (9) 村瀬学『銀河鉄道の夜』とは何か(大和書房)一九八九

※本文・引用は「新」校本宮澤賢治全集（筑摩書房、一九九五）による。旧字は適宜新字に改め、ルビは省いた。傍線はすべて論者に拠る。

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

**A Study of Miyazawa Kenji's "*Kai no hi*":
on the Dad and Child's Desire**

Mayumi NISHIMURA

"*Kai no hi*" (The shell's fire) is a tale about a rabbit called Homoi, who is awarded an unusual prize, the shell's fire, for having saved a small skylark from drowning in a river.

Previous studies have often expressed considerations pivoting around the Lotus Sutra and the writer's biography, and such viewpoints are undoubtedly important. Nevertheless, couldn't new things be discovered analyzing this work word by word, from the inside, instead of limiting ourselves to an approach from the outer context? I don't want to say, of course, that such an inner study has never been attempted by other researchers, but still I do believe, on the other hand, that many details have been overlooked. This paper aims at detecting new aspects of this work, mainly by reconsidering the relation between Homoi and its father, but without ignoring the small textual details that tended to be neglected in the past, and this tale's relation to other works by Miyazawa Kenji.

キーワード：宮沢賢治，貝の火，父と子，欲